道徳教材研究（作品の源流・源泉に向かう「心の旅」）

浜田広介の生涯からみつめた「泣いた赤おに」

～「語り聴かせ」からの感化～

前川　直也

道徳教材研究。広くて深い研究内容である。この論文は、教材の源流、「作品の誕生」に深く関わる探究である。私は、昭和62年春以来、小学校教師として、教材の理解（分析・吟味）をはじめ教材提示など、「泣いた赤おに」の教材研究を、授業実践を基盤としながら追究してきた。子供たちから学び続けてきた、“教材研究の歩み”がここにある。

今回、これまでの研究を更に深めるため、過去に向かい「心の旅」に出ることにした。

教材の源流、源泉に向かう。文学作品（童話）「泣いた赤おに」が、いかにして作者、浜田広介（はまだひろすけ）の人生から生まれたのか、広介の生涯に遡上（そじょう）して、深くみつめてみたのである。

「泣いた赤おに」という教材（童話作品）が、どうして、イツマデモ、ドコマデモ、人々の心に響くのだろうか。心惹かれるのか。その価値に迫るために、これまでの、数々の「語り聴かせ」からの感化（感動）の証（言葉の束など）をみつめ続けた研究でもある。

私は、小学校における教師としての一本道を歩み、還暦を迎える節目のときとなった。

道中、道徳教育、その中でも「泣いた赤おに」は、いつのまにか、私にとって、親友のような存在となっていた。授業実践や、「語り聴かせ」の歩みは、理論の底流、土壌ともなっている。この論文は、広介本人をはじめ、“多くの方々の言葉の引用”を重視したものである。言葉は、人々の命、人生（生涯）そのものである。敬意と継承の証としたい。

未来の幸せを心から願い、過去と現在に感謝をしながら、祖述（そじゅつ）させていただくのだ。

「序の言葉」

麗澤（れいたく）大学院に入学するきっかけをはじめ、大学院生活、修論研究にあたり、「感化」と「応援」をいただき続けた先輩がいる。北村博（きたむらひろし）・土屋康子（つちややすこ）である。私は、この二人から言葉をいただいた。それは、私にとって、有り難い、奇跡の“言葉の贈り物”であった。

「序（じょ）の言葉」から始まる執筆の仕方は、主査（しゅさ）である、井出元（いでもと）の助言の「おかげ」である。

浜田広介（はまだひろすけ）は、大正時代、自著を世に送り出す際、尊敬する島崎藤村（しまざきとうそん）より、“序の言葉”を贈られた。私はその言葉をみつめていた。後に誕生する「泣いた赤おに」、赤おに

が記す、“立てふだの言葉”との「呼応」を感じたのだ。「感化」の足跡をみつけたのである。

人物が紡(つむ)ぐ、「人生（生涯）の物語」、「感動と感化」の証がそこにあったのである。

「はじめに」（修論の「底流」）

論文の冒頭。私の心の奥底に深く残る、ある児童（２年生）の言葉を紹介したい。

前川先生、おねがいがあります。あと一度だけでいいですから。もう一度だけ、「泣いた赤おに」のお話をしてください。

平成 27 年。涙もあった「泣いた赤おに」の道徳授業を終えた、放課後の教室だった。

この児童の熱い言葉は、私自身の、これまでの教師人生を振り返る「問い」となった。

“「泣いた赤おに」は、なぜ心に響くのか。心惹かれるのか。”（※麗澤大学院での学び）

麗澤(れいたく)大学院、川久保(かわくぼ) 剛(つよし) からの助言（上記の言葉）とも重なった。“心の弦”が鳴った。

“「泣いた赤おに」は、まさに、泣いた赤おにである。”

副査(ふくさ)、鈴木(すずき) 明雄(あきお) の言葉である。また副査、冨岡(とみおか) 栄(さかえ) からは、「共生」「信頼」の言葉を。

“作者、浜田(はまだ) 広介(ひろすけ) が、生涯貫いた信念とは何だったのだろうか。”

この富岡の言葉は、研究のゴールに向かう貴重な羅針盤、私の信念ともなった。また、研究を行う上で“歴史的な視点”をもつことの大切さは、江島顕一からの助言であった。

道徳教材の源流、源泉、童話「泣いた赤おに」への着目。作品を生み出した作者は、どのような生涯を歩み、どのような背景が描かれたのか、みつめてみたのである。

研究は厳しい。だが、いかにそのことを幸せに想うか。その在り方を、笑顔で示されたのが、中山理であった。まさに、「Well-being」である。また日本のみならず、海外つまり、大きな広い視点で道徳教育をみつめることは、堀内一史などから学んだ。そして、研究で一番大事な「品性」の養い。その手本となった人物が橋本富太郎だった。入学した年の夏頃には、原田恵理子が、教育相談の授業をとおして、「心の潤(うるお)い」を届けてくれた。

岩佐信道からは、道徳教育をとおした「師弟愛」、髙橋史朗からは、「感性」を学んだ。

その他、多くの先生方との出会い、その学びが、修論全体の「土壌」になっていることをお伝えしたく記した次第である。私の修論は「感動と感化」が紡ぐ、感謝の証である。

数々の授業実践、「語り聴かせ」は、多大なご理解とお力添えのおかげで実現をした。何と言っても、子供たち、聴き手の皆さんの、「語り聴かせ」にふれた「感想の言葉」があってこその本研究である。どの感想も味わい深いものであった。私や世の中への「問い」となる言葉もあった。以上、論文の底流の一隅を紹介したところで、筆を進めたい。

「第１章　研究の目的と方法」

研究の目的を語る際にも、私自身の人生を重ねてみた。自らへの「問いかけ」である。

（目的）

１　「泣いた赤おに」の魅力や価値を追究、祖述する。

２　「作者、浜田広介の生涯」の魅力や価値を追究、祖述する。

（方法）

◎　先行研究（先人の業績）から学ぶ。（第２章）（※まず、作者（広介）本人から学ぶ。）

（１）作品「泣いた赤おに」を生み出した作者（人物）の生涯を理解する。

①　作者、浜田広介にとって、一番身近な存在の「家族」や「故郷」から注目する。

広介と「晩年」まで一緒にすごした、娘の留美（著書）「父浜田広介の生涯」から学ぶ。

②　作者（広介）が受けた「感化」、作者が与えた「感化」の言葉を大事にする。

広介が、大学時代、大きな「感化」を受けた、アンデルセンの「記し方」から学ぶ。

広介を敬愛する方々（郷土の方々をはじめ、先行研究者）の言葉の束に注目する。

広介の郷土（山形県高畠町（旧屋代村））を、実際に訪問する。（令和３年の晩秋）

先行研究者、冨樫徹を訪れる。冨樫の高著「浜田広介の世界－その魅力」から学ぶ。

・当時の児童文学批評家による、「ひろすけ童話」批判に注目する。（批判から学ぶ。）

③　作者、広介が記した、数多くの他の作品（童話・童謡・詩など）も吟味する。

広介の母校（屋代小学校）を訪問する。郷土の誇り、広介を讃える、特色ある活動を理解する。母校の「広介コーナー」からも学んでいくのである。

（２）童話「泣いた赤おに」を理解する。（※副読本（教科書）は、理解してきた。）

①　「泣いた赤おに」の誕生、成立、変遷の過程（道徳教科書の源泉）をたどる。

・広介の郷土、母校の後輩、前浜田広介記念館長の樋口隆の高著、「ドコマデモ考－童話『泣いたあかおに』成立論」から学ぶ。

・広介の郷土（山形県高畠町）への現地調査（浜田広介記念館など）を行う。

・初出（昭和８年当時）をたどる。その後の改題や、改作の意図を追究する。

②　実践（道徳授業「語り聴かせ」）から、「泣いた赤おに」を理解する。

・私がはじめて行った「泣いた赤おに」道徳授業（Ｈ５年）の原点に遡上する。

・これまで行ってきた「泣いた赤おに」道徳授業の、数々の歩みを振り返る。

・勤務校のみならず、他の様々な場所でも「出前授業」（授業実践）を行ってみる。

・小学校のみならず、幼児や学生、大人に対しても実践をし、その感想から学ぶ。

広介自身は、「何人にも読まれてもよい」文学を、童話の世界に求めた。様々な発達段階の人々は、教材（童話）「泣いたあかおに」をどのように感じるのか、その証から追究する。

・勤務校（練馬区立南田中小学校）では、校長、原田知樹の理解・協力を得て、（全学年・全学級）で、「泣いた赤おに」の道徳授業を行ってみる。特別支援（知的障害）学級でも「語り聴かせ」を行う。全校児童の感想の束を、深くみつめていく。

「第２章　先人（先行研究）：他者からの学び」

本章は、先行研究（先人の業績）をまとめたもの、つまり、学び（理解したこと）の紹介である。つまり、「基礎研究の要」となる章である。特に、“先人の言葉”に注目をした。

私は人物を深く理解するために、引用（言葉の足跡の数々）を重視した。長い引用もたびたびである。“引用の論文”とも言えよう。それは、先にも語ったように、抜粋、精選では伝えきれない、私なりの理由、人物理解の矜持があったのである。ご理解いただきたい。

第３章の最後でも、本修論の集大成として、「泣いた赤おに」を、あらためて振り返る。その際、数行ずつ、区切りながらの引用ではあるが、絵本「全文」を引用させていただく。

私は、底本を絵本「ないた赤おに」（金の星社刊）としているので、金の星社編集部と、日本著作権協会著作権管理部に相談をしてみた。絵本「ないた赤おに」の「全文引用」に関しては、協会をとおして、広介の親族である著作権継承者の理解、協力、了解を得た。合わせて、絵本画家の、いもとようこの絵も、関連する絵に関して掲載をさせてもらった。

金の星社の編集部ならびに、本人のご理解、ご協力に感謝をしている。

なぜ、ここであえて語っているかと申せば、研究倫理にも関係することだが、書籍一つにしても、多くの先人や様々な立場の人々の心の結集、想いの束が紡がれている。多くの先人の方々の貴重な業績とその想いを、未来に祖述することが、この論文の使命である。

第２章は、「泣いた赤おに」「浜田広介の生涯」に関する基礎研究であるが、若い教師の方々をはじめ、「泣いた赤おに」に関係する教育関係者や、研究者の方々のための、基礎・基本となる学び（土台づくり）のための、参考資料、お役の一隅になればとの想いがある。

修論研究の始め頃、私自身、「泣いた赤おに」について理解していると自負していたが、まったく知らないことばかり、初めて知ることが何と多かったことか。お気に入り、とっておきの道徳教材として、何度も語り聴かせを行ってきた自分自身が恥ずかしく想えた。

ましてや、作者のことなど、浜田広介というお名前と、東北山形県が故郷であるとい

うぐらいしか知らなかったのである。作品を生み出した作者への敬意など、ほとんどなかったに等しい。作者の想い、願いなど、理解しようとする考えも浮かばなかったのである。

ただ、ひたすら、目の前にある副読本（教科書）の各会社のものを読み比べて、教材研究をしているつもりであった。作者が、いつ頃、どのようなことを願って、誰に向かって、執筆をしていたのか。私はただひたすら、教材提示、「語り聴かせ」から始まり、どのように発問につなげ展開していくかという、教材活用論に明け暮れていた。そのための、「語り聴かせ」をいかに上達させていったらよいか、そのような課題意識をぶらさげて、大学院の入学試験に臨んだのであった。勢い余って、「語り聴かせ」のスキル（指導技術）をどのように向上させようかなどと、意気揚々と語っていた私がいた。その生意気な人間を、井出元は、大きな心で、あたたかくみつめてくれていた。井出の眼差しを忘れられない。

「低く、やさしく、あたたかな」眼差しとともに、凛とした静かなたたずまいがあった。

前述の廣池千九郎が説き、私も後に学ぶ「人格的感化」が、そこに存在していた。

ご縁あり。主査、指導教授は、井出元となった。井出は人物研究者として、麗澤大学の創設者、廣池千九郎の研究でも多くの功績がある。その井出が、私に語った言葉がある。

“なぜ、浜田広介は、「泣いた赤おに」を生み出したのだろうか。”

“どうして、「泣いた赤おに」は、浜田広介の生涯から生まれたのだろうか。”

この井出からの言葉との「出会い」や「感化」があり、第２章を貫く信念につながった。

１「浜田広介の生涯」

明治 26 年５月 25 日。山形県置賜郡屋代村（現高畠町）で産声をあげた。本名は、廣助。

以下、広介に「感化」を及ぼした、最も重要だと想われる人物を紹介する。

①母やす、祖母いよによる「昔語り」。　②巌谷小波による「お伽話」、口演童話。

③アンデルセンによる「芸術性を感じる童話」。自らの人生を童話の世界におりこむ。

広介は、アンデルセンとは、大学時代、翻訳のアルバイトをとおして、時空を越えて出合った。その他、島崎藤村や、親友野口雨情など。「孤高」の人と呼ばれた広介であった。

広介が、当時の米沢中学校に入学して間もなく、母やすは、妹弟を連れて、実家に帰る。広介は長男。父為助との二人暮らしになったのだ。突然の母との別れ。母やすとの別れは、「泣いた赤おに」の最後で登場する手紙の文面と、大きく関係していると、私は捉えた。

２「泣いた赤おに」

「このお話は、出世魚のようだ」と、娘の留美も、自著で語っている。初出は、昭和８年「おにのさうだん」。幼年雑誌の中で誕生した。翌年、「鬼の涙」と、改題（改作）され、昭和10年に、さらに改題（改作）され、「泣いた赤おに」となった。その後も作者の広介によって、「泣いた赤おに」は、作品が世に出る（出版の）たびに、加筆修正が繰り返された。広介は娘の留美に「原作は、一番、最後に書いたもの」と語っていたのだ。

そのような、広介の生涯もあり、原作を考えることはむずかしい。だからこそである。童話「泣いた赤おに」の成立過程、変遷のあゆみを研究された、樋口（ひぐち）隆（たかし）の業績は大きい。

樋口は、様々な「泣いた赤おに」を、「幼年系」と「広汎系」の二つに区別したのだ。

昭和30年代以降、前述の児童文学批評家たちは、「泣いた赤おに」についても、厳しい批判を行っている。昭和48年11月17日。広介は、亡き母やすのもとに帰っていった。

晩秋の落陽（らくよう）が、まばゆく光る大海にゆったりと浮かぶ、一枚の花びらのようであった。

「第３章　『浜田広介の生涯』及び『「泣いた赤おに」実践からの追究」

私には二人の恩師がいる。荻原武雄（おぎはらたけお）と後藤忠（ごとうただし）である。人生の師（し）であり、朋（とも）とも慕う。

第３章の冒頭。「泣いた赤おに」と「感動と感化」の人々とのつながりの視点を記した。

次に「ひろすけ童話」の主な作品を、広介の生涯の順番から、「泣いた赤おに」誕生との関連を考え、模索してみた。そして私は、「泣いた赤おに」道徳授業などの「語り聴かせ」、実践からの“感化”に注目していった。学級担任をしていた頃から始まり、「出前授業」も数多くある。教室などで語られた「聴き手の言葉」のすべてに注目をした。児童も幼児も、私にとっての“先行研究者”である。未来からみつめてみれば、貴重な先人なのである。

その「語り聴かせ」の歩みは、本研究にあたり、20ほどの実践として積み重ねてみた。「聴き手」は、小学校の児童のみならず、保育園や幼稚園の幼児、大学生や竹早教員保育士養成所の学生の皆さんや、大人の皆さんなど、様々な立場、年齢の方々であったのだ。

その中で、勤務先の小学校（練馬区立南田中小学校（ねりまくりつみなみたなかしょうがっこう））の実践では、全校（１～６年生の全学級、特別支援学級（知的障害））で、すべての学級担任とともに、ＴＴで「泣いた赤おに」の道徳授業を行ってみた。道徳的心情を養うことをねらいとした。いずれの学年でも、中心発問は、お話の最後、「青おにからの手紙を読み返し、泣いた後、その手紙を握りしめ立ち上がった」赤おにの気持ちを感じ考えさせた。絵本：「ないた赤おに」画いもとようこ（金の星社刊）による場面絵、ＢＧＭは、宗次郎のオカリナＣＤ「心」、終末は「ビリーブ」

と、「何人にも同じように」「語り聴かせた」実践の束を、そこに積み重ねていった。

現２年生と６年生には、昨年度今年度と、２年連続で「語り聴かせ」て、その感じ方の違いもみつめてみた。「泣いた赤おに」。「結末はとても悲しいお話だが、また聴いてみたいと想う子供や大人たちはいるのだろうか？」。「泣いた赤おに」の話の内容や、私の語り、未来への継承（「古典」となりうるものか）などについては、その「感想の言葉」（質）を重視したが、500 人ほどからのアンケート調査の結果もまとめ、合わせて記載した。ちなみに、「『泣いた赤おに』のお話は心に残ったか」という質問（５択）に対して、470 名中、278 名が、「⑤お話が、心によく残った」（59.1%）と回答をしている。また、「語り聴かせ」に関しては、470 名中、355 名が、「⑤とてもよかった。」（75.5%）と回答をしている。その他、「『泣いた赤おに』が、未来に残すべき「古典」か（残したいか）」では、470 名中、267 名が、「⑤ぜひ、未来に残したい。」（56.8%）と回答をしている。以上、アンケート結果の一隅である。第３章の実践事例の後には、広介の故郷（ふるさと）山形県（高畠町（旧屋代村））への訪問記や、最近の世情からも、「泣いた赤おに」をみつめてみた。また、教材開発として、作者「浜田広介物語」にも取り組んでみた。物語は、道の始まり、途中である。広介の誕生から、40 歳の節目の直前、「泣いた赤おに」（初出：「おにのさうだん」）の執筆直前のことまで、授業での活用を想定して書いてみた。そして、あらためて、“童話（絵本）「ないた赤おに」の全文”を、数行ずつ、区切りながら記し、私の言葉を添えてみたのである。

私自身の教材理解研究で得た総結集である。本研究を行ったことにより初めて知り得たことはもちろん、私自身の、世の中への「新たな提言」もその中にも盛り込んでみたのだ。

「第４章　研究の成果と課題」

１　成果（温故知新）

道徳科の命となる教材。教師の教材吟味や、魂の提示は、心に響く授業の基盤である。

自らの教師人生を振り返り、「泣いた赤おに」に心惹かれ、語り続けてきた理由や、証を模索したく、この研究を進めてきた。作品の作者である、浜田広介の生涯を理解（歴史への遡上）し、私自身の「人生の物語」とも重ね合わせ、教材（作品）理解に迫る研究の歩みを、泥くさく積み重ねてきた。作者、広介をはじめ、多くの魂との出合いがあった。

Ａ　「浜田広介の生涯」・遺志の理解・人生の吟味について考えられた。

（１）教材研究の行い方（作者、浜田広介の生涯の理解）を模索できた。

①　なぜ、広介はこの作品を生み出したのか、私自身の明確な「問い」がもてた。

② どうして、何人の心に響くのか、心惹かれるのか、その理由と応えをもてた。

それは広介の人生、あたたかい人柄が滲(にじ)み出ているからだ。感動と感化の表れである。

（2）広介の「生い立ち」から生涯をみつめられた。

① 生い立ちは、人物を理解する上で、とても重要で大事なことが理解できた。

誕生から始まり、幼少期、青年期を理解することは、その人物を理解する上で、とても貴重であり、大切なことを感じ、理解することができた。

（3）広介が受けた（与えた）「感化」（人々、風土）からみつめられた。

小学校時代は、お伽噺(とぎばなし)作家である巌谷小波(いわやさざなみ)。大学時代は、アンデルセンと。それぞれの書物をとおして出合った「感動と感化」があった。

① 「感動」「感化」が、その人物にどれだけ影響を与えるのか。そのことがわかった。

青年期の母やすとの別れ、単身での上京はその後の広介に、「感動や感化」をもたらした。

（4）広介が執筆した作品を、（生涯の順番）からみつめられた。

① 小説から「広介童話」作品を、生涯順でみつめることで、広介理解につながった。

（5）広介に関する先行研究を大事（温故知新）にすることができた。

① 娘留美（家族）から、郷土の方々が執筆した先行書籍は、広介理解に役立った。

広介の家族が、一番身近に「広介を語る存在」である。娘、留美(るみ)（次女）が、父広介の生涯を書籍に記したものを一番の先行研究内容としたことは、広介理解に大いに役立った。

② 広介（本人）が執筆した言葉（原稿）も大事にできた。広介の魂を感じられた。

広介本人が記した言葉は、その生涯を語ってくれた。本人が語った言葉はもちろん、また、広介自身が一生、語らなかった言葉（秘話）も、娘留美が語ってくれたのだ。

（6）「ひろすけ童話」批判を受け止め、自らの「問い」とすることができた。

① 批判から、自らの研究の「問い」を明確にもつことができ、応えることができた。

当時の児童文学批評家たちの強烈な批判は、確固たる、私への「問い」ともなった。その問いにどのように応えていくか。そのきっかけを与えてもらったとも想えたのである。

（7）広介の郷土、山形県高畠町を訪れることができた。

① 広介に関係する人々や、広介が育った風土に実際にふれて感じることができた。

② 「ひろすけ童話」、広介の遺志の尊重、文学という視点から考えることができた。

「泣いた赤おに」だけではなく、数多くの「ひろすけ童話」から学ぶことができた。

③ 研究を行う上で、大切にしなければならない大事なことを学ばせてもらった。

研究を行う者自らの「品性」や「倫理観」、「人間性」がとても大事であることを学んだ。

④　「語り聴かせ」に向かう姿を学ばせてもらった。（郷土の「語り部」にふれる）

⑤　道徳授業での「ひろすけ童話」の扱い方、授業展開の在り方を学んだ。

（８）道徳授業（導入）で、作者「浜田広介」の生涯を紹介できた。

①　研究をすすめる過程で、道徳授業の導入で、広介の生涯を紹介するようになった。

Ｂ　「泣いた赤おに」教材理解（分析・吟味・提示「語り聴かせ」）を行えた。

（１）教材研究を（作者、浜田広介の生涯（人物）の理解）から行った。（温故知新）

①　童話「泣いた赤おに」の誕生に向けた源流、源泉（おにのさうだん）に遡上できた。

（２）広介の「生い立ち」から生涯をみつめられた

①　広介の、幼少期から青年期にかけての「感化」について考えることができた。

「ひろすけ童話」は、そこに「空想と真実」の世界があるのである。広介は、青おにであり、赤おにでもあったのである。幼い頃のよき思い出が、「ひろすけ童話」のパン種となった。様々な「感化」の証が、広介の「人格を形成」していったのである。

（３）広介が受けた（与えた）「感化」（人々、風土）からみつめられた。

広介の人生の一番の危機は、母やすとの別れ、一家破産、単身での上京当時であろうか。

（４）広介が執筆した作品（生涯の順番）からみつめられた。

「泣いた赤おに」の教材研究に向けて、「広がりと深まり」がもてた。

（５）広介に関する先行研究を大事（温故知新）にすることができた。

広介の生涯にあたっては、浜田留美（はまだるみ）（次女）、冨樫徹（とがしとおる）（先行研究者）の書籍から多くのことを学び、まとめてみた。「泣いた赤おに」の成立に関しては、前浜田広介記念館館長、樋口隆（ひぐちたかし）の高著、「童話『泣いた赤おに』成立論－ドコマデモ考－」から学ぶことができた。

広介のテキスト（作品）が、「幼年系、広汎系」という、二種類に分けられている事実から、作者、広介・「ひろすけ童話」「泣いた赤おに」の作品理解を深めることができた。

（６）「ひろすけ童話」批判を受け止め、自らの「問い」とすることができた。

子供や大人の言葉の事実から、その批判に応えうる証を丁寧に検証することができた。

（７）広介の郷土、山形県高畠町（旧屋代（やしろ）村）の地を、実際に訪れることができた。

（８）道徳授業の導入の時間などで「浜田広介の生涯」を紹介することができた。

（９）小学校まるごと１校、全学年、全学級で「泣いた赤おに」道徳授業ができた。

子供たちからは、同じお話を、繰り返し聴いても、想いや考えが広がり深まっていると返ってくる。低学年から高学年までの子供たちが、「ひろすけ童話」の代表作、「泣いた赤おに」の世界に、じっくり浸（ひた）れた。道徳的心情の高まり、養いを実感することができた。

(10)「泣いた赤おに」。様々な年齢の方々の「感想の束」から提言することができた。

「泣いた赤おに」は、「未来に引き継ぐべき『古典』である」と「祖述」することができた。

Ｃ　「語り聴かせ」の向上にむけて、その手立て（スキル）を紹介することができた。

（１）児童・生徒理解（人間理解）に徹すること。（事前・事中・事後においても。）

（２）語るとは、吾を語ること　相手に語り、自己に語りかけること。

（３）心の中でも聴こうとすること。　心の中で対話を試みるのである。

（４）語り手（教師など）自身の声を大切にする（心をこめて届ける）こと。

（５）聴き手の眼差しに、言葉を語りかけること。　読み聞かせとの違いを考えること。

（６）教材（作品）は、何度も読み込み、語ること。　教材は、教師からの贈り物である。

（７）原作を読み込んでおくこと。作者の願いを理解すること。　作者に敬意をもつこと。

（８）作品の作者（人物）を理解しておくこと。可能であれば、その生涯も理解すること。

（９）音楽の力（ＢＧＭ）の活用を考えてみること。場面とのつながりも考えること。

(10) 場面絵の活用を考えてみること。　ふきだし一枚にも、大きな効果がある。

(11) なぜ語るか。　教材の内容を、語り手自身はどのようにとらえるか考える（教材観）。

(12) いつ、どこで、だれに語るのか。　聴き手の発達段階を理解する。

(13) どのような反応をしているか。つぶやきや表情をつぶさにみつめること（人間理解）。

(14) 一人芝居ができるか。　教室は、お話の舞台である。　教師自身が感覚を投入する。

(15) 放課後の教室、教師一人だけで授業ができるか。　聴き手の反応を予想すること。

(16) 配慮を要する子供（特別支援教育）など、聴き手の特性にも心を配ること。

(17) 日頃から鍛錬すること。　落語や講談などにふれること、様々な語り手から学ぶ。

(18) お話は、どのようにして生まれたのだろうか。（誕生秘話・歴史的背景を探る。）

(19) 語り手の声量や、速さ、間のとり方、聴き手の想い、環境に心を配ること。

(20) 聴き手の率直な感想（手立て）を大事にしたい。　聴き手の想いが語り手を育てる。

【感動に関しての想い】（令和５年２月：練馬区立南田中小学校２年生の感想）

「大人になっても、このかなしい、かんどうするお話を、ぜったいにわすれません。」

【自分の生き方に重ねてみて】

「大人になっても、出あいがあれば、わかれもあるけれど、さいかいがあることを、大人になってもわすれません。」

【「泣いた赤おに」のお話を、また聴きたいな】

「かなしいお話だった。また、ききたいです。」

「きょうの、ないたあかおにのお話、２かいめだったけれど、いいお話だなと、おもいました。よかったら、またやってください。」

「今年もかんどうしてなきました。３年生になっても、４年生になっても、５年生になっても、６年生になっても、ないた赤おにの、どうとくをやってください。」

２　課題（未来への継承　よりよい道徳教育（教材理解・提示・開発）への追究・創造）

Ａ　「浜田広介の生涯」・遺志を理解すること　作者の人生を吟味すること。

（１）作者、広介の生涯を理解し続けること。

（２）作者、広介が受けた（与えた）「感化（感動）の足跡」を考え続けること。

（３）作者、広介に関する先行研究を学び続けること。　自ら記した修論からも学ぶこと。

（４）「浜田広介の生涯」の魅力や価値を継承し続けること。　祖述の在り方を学ぶこと。

（５）「ひろすけ童話」（道徳教材）批判への応え方を模索し続けること。

（６）皆が行う道徳授業にも活かせる手立てを模索し続けること。

Ｂ　童話「泣いた赤おに」理解（分析・吟味・提示など）から考え続けること。

（１）童話（道徳教材）「泣いた赤おに」が生まれた意味、価値を模索し続けること。

（２）童話（道徳教材）「泣いた赤おに」の成立過程を学び続けること。

（３）「泣いた赤おに」（童話・道徳授業）における先行研究から学び続けること。

（４）「泣いた赤おに」の未来への継承（祖述）の仕方を模索し続けること。

（５）「泣いた赤おに」（道徳教材）と絵（の力）との関係を模索し続けること。

（６）「泣いた赤おに」（道徳教材）と音楽（ＢＧＭの力）との関係を模索し続けること。

（７）「泣いた赤おに」（道徳教材）と「語り聴かせ」との関係を模索し続けること。

（８）「泣いた赤おに」と他の「ひろすけ童話」との関連、つながりを模索し続けること。

（９）「泣いた赤おに」と他の道徳教材との関連、つながりを模索し続けること。

(10)「泣いた赤おに」（道徳教材）と終末との関係を模索し続けること。

(11)「泣いた赤おに」の主価値、関連価値（中心発問）との関係を模索し続けること。

(12)「泣いた赤おに」における、「出前授業の在り方」を模索し続けること。

(13)「泣いた赤おに」と道徳教材（教科書）との関係を模索し続けること。

(14)「泣いた赤おに」（作者の遺志を尊重する）道徳授業を創造すること。

(15)「泣いた赤おに」と世の中（国際社会）の幸せとの関係（鍵）を模索し続けること。

(16)「泣いた赤おに」「浜田広介（はまだひろすけ）の生涯」その価値を、未来に向けて祖述すること。

「主な参考文献」

- 荻原武雄（おぎはらたけお）・久保千里（くぼちさと）（1997）『感動と感化の道徳授業』明治図書
- 冨樫徹（とがしとおる）（2006）『浜田広介の世界－その魅力』東北清流舎
- 西沢正太郎（1991）『「ひろすけ童話」に聴く』宮本企画
- 西沢正太郎（1994）『ひろすけ童話ひとすじに』ＰＨＰ
- 浜田廣介（1969）『童話文学と人生』集英社
- 浜田廣介（作）・いもとようこ（絵）（2005）『ないた赤おに』金の星社
- 浜田留美（はまだるみ）（1983）『父 浜田廣介の生涯』筑摩書房
- 羽山周平（1992）『さくら花咲く庭にして』北効書房
- 羽山周平編著（1994）『濱田廣介ふるさと書簡集』教育報道社
- 樋口隆（2017）『「ドコマデモ」考　－童話「泣いた赤おに」成立論－』不忘出版

「追伸」:「卒業文集」より

令和５年も２月も半ば。学校に入ると、赤い梅が咲き誇っている。別れの春でもある。

勤務校である、練馬区立南田中小学校の６年生の教室では、子供たちは、卒業に向けて、「卒業文集」の原稿に心を傾けていた。シーンとした教室の中で、私は子供たちの想いを、みつめていた。どの子の眼差しも真剣である。このかけがえのない小学校生活（６年間）の数々の思い出の中で、どのようなことを、未来の自分に語り継ごうとしているのか。

その中で、ある児童は、**「先生方への感謝」**という題で、鉛筆に心をツナイデいた。

私は背中ごしから、静かにみつめていた。遠目で読ませてもらっていたのである。

その子が綴った 33 行目からの、“言葉の束”に、驚きを隠せなかった。声も出ない。

> **四つ目は、担任の先生だけでなく他の先生方にも感謝している。それは、前川先生の授業で、「泣いた赤おに」がとても印象に残るものだった。前川先生が、一人芝居で演技をしながら、「泣いた赤おに」を教えてくれて、すごく心につきささり、感動した。友達を思う気持ちを深く考えることができた。**

その子は、日頃から静かな女児であった。申し訳ない。私の記憶の薄さが恥ずかしい。

これまで、道徳授業の「出前授業」や「語り聴かせ」の際、事後に感想を書いてもらったことはあった。ただ、この想いを表出している場所は、「卒業文集」という原稿用紙のマスの中にである。還暦近い、おじさん（おじいさん）先生は、動揺し心が震えてしまった。

休み時間、若い担任の先生（一緒にＴＴを行った）は、「前川先生に、サプライズしよう

と思っていたのですが、みつけてしまったのですね」と、嬉しそうに笑っていた。

私は、そのとき、どのような顔をしていたのだろうか。嬉しい気持ちは、当然あったであろうが目は点だったのだろう。“学校に奉職する者の責任の重さ”。背筋がピンと伸びた。

この子は、小学校の思い出の一つとして、「泣いた赤おに」を、未来（将来）に引き継ごうとしているのである。「感動と感化」の証の一つとして、本論にバトンを渡そうと想う。